
クリスマス in 雑貨屋

natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマス in 雑貨屋

【Nコード】

N8829I

【作者名】

n a t u

【あらすじ】

クリスマス近くの世界。

素っ気ない雑貨屋（前書き）

どうも。覗いてくれたら嬉しいな。

素っ気ない雑貨屋

「さみいな……、全く昼になってもこの寒さじゃ、クリスマスとかって騒いでられねえぜ」

呟いてから、少年は上を見た。しかし、視線の先には灰色の空しか無い。天気が悪いな、と少年は舌打ちした。

灰色の空眺める少年を、隣にいた少女が突如殴った。

「空ばかり見るんじゃないわよ。せつかく街に来たんだから、お買い物しましょう？ 手袋でしょ、マフラーでしょ、クリスマスツリーでしょ……あ、靴も欲しいわ」

少女は、肩までの漆黒の髪を持っていた。少年は、それに視線を移し、似合う髪飾りを買ってやりたいなと考える。と、同時に、まるで今の空のような色をしているなと考え、大きな溜息をつく。

今の彼にとつて、雨や曇りは最大の敵だった。彼女が、急に体調を崩すからだ。

元々体が弱い、俗に言う幼馴染の彼女を、彼はいつも親達に言われて面倒を見ている。今日も、クリスマスとか冬用の物の買い物をしたい、と家を飛び出した彼女を、親達が助けてやれと（ほぼ荷物持ちという意味で）頼んだのである。

渋々、彼は着いて来た。親と喧嘩するのが嫌だったからだ。

「ねえねえ、あの店なんてどうかしら？」

空と違って明るい店が立ち並ぶ街で、彼女が選んだのは、穏やかな光の洩れる雑貨屋だった。木で出来た看板に素っ気なく“雑貨屋”と書かれている。入り口に隣する壁も木で出来ていたが、扉だけは硝子で、店内が覗けた。店内は、彼らからの距離では、はっきりとは見えなかった。しかし、それほど広くも無いのか、それとも数が多いのか、扉から見える棚だけでも、数え切れないほど商品並べられていて、料金を示す札がそれぞれに掛かっている事だけはかうじて判った。

そして硝子の扉には、ベルのついたリースが飾ってある。

雑貨屋の周りを商品で飾れば、これほしいなと客が集まってくるだろう、と少年は考えつつ少女に話しかける。

「あの店、経営はしてそうだけど、何か……地味すぎないか？ 穏やかっという雰囲気は出てるけどよ」

「そうかしら？ でも何か惹かれるのよ。あそこに行った方が良いわって、感じられるの！」

乙女の勘だと思ってくれて良いわよ。だから、行きましょう！」

「はあ！？ 乙女の勘！？」

これだから女は嫌だ、と少年は悪態をつく。しかし、少女は扉へ嬉しそうに走ってゆく。

待て、と叫ぶ少年に、少女は振り返らずに言い返す。

「あのねえ、だからって人気の所は行きたくないんでしょ？ じゃ、我慢しなさい」

「ちょ……悪徳だったらどうするんだ！？」

しまった、声が大きかったか、と気づくが遅い。道端を歩いていたら人々が、何だ何だと少年を睨む。

人で賑わう街で、大声を出すなど、大勢の視線の的になるだけだ。こんなに睨まれたりしていたら、彼女を力ずくで止める事は難しい。喧嘩しているように見えるのならばまだ良い方だが、彼女は絶世の美少女であった。襲っているように見られ、警察が出てくるかもしれない。

考えすぎに取れるが、人の多い街での犯罪は多く、警察も私服で見回っているのだ。ほぼ私用で出回っている輩もいるが。

こんな時に指導など、クリスマスをいい気分で迎えられるかどうか。それに恥ずかしい。

しかも、力ずくで彼女を止めて、体調を崩されても困る。少し考えてから、少年は、最終手段に出る。

「じゃ……俺は行かない」

「何で？ ついて来てよ！」

やっと振り返る少女。黒い瞳に少年が写る。

「嫌だね。俺はただの幼馴染で、荷物を運んでやれと促されて来ただけだ。母親には逆らわないほうがいいからな、クリスマスの日に晩御飯抜きにする、とか言われたらこの世が終了するぜ」

きつと置いて行こうとしたら、体の事を気にして一人で行くのを拒み、追いかけてくるだろう、と踏んだのだ。

「莫迦ね、だったら着いて来ないと怒られるでしょ？」

「良いんだよ。別に気にする事は無いぜ？ 彼氏じゃないんだしな」
突き放し過ぎたかな、と今更悔やむ。少女は、泣きそうな顔で少年を睨んだ。

それから、少年の手を強く引つ張る。

「私の彼氏じゃないと着いて来ては駄目ってルールでもあるの？」

「うぐッ……」

彼は、彼女のその瞳に弱かった。泣きそうながらも強い意志の瞳に。

しかし、賑わってない店は、悪徳か、商品が悪いか、どちらが多い。もしかしたら、人目に付かないだけで、良い店なのかも知れないが。

しかし、彼には行きたくない、他の理由もあった。それは、

「でも、親は七時までには帰れっていったぜ？」

「今……五時半じゃない！ 余裕でしょ、よ・ゆ・う！」

「お前、後で違う店も見ると？ あんな商品の多い店に行ったら、あれが欲しいやらこれが欲しいやら、凄い時間を消費しちゃう」
そう、時間だった。彼の親は時間に煩い。五分くらいならまだしも、十五分くらい遅れても説教が待ち受けている。

怒った親には言い訳が通じない事を、彼は熟知していた。

「……行きたいよ、あそこ」

彼女は、遠くを見つめるような目でその店を見つめていた。
「我慢しろ」

素っ気ない雑貨屋（後書き）

お疲れ様！

続きますぜ！

英語？

「いや。我慢なんて……したくないよ」

彼女は、唇を噛み締めて言う。

少年は、もう一度その店を見る。両隣の店は、潰れたようで、あの店からだけ、光が洩れている。

あんな潰れた店に挟まれた店なんてすぐに潰れるさ、と彼は嘲笑う。それを言おうとして、少女に目線をやると――少女は、口を押さえていた。

凄く青い顔をして、今にも倒れそうに見える。

「おい……大丈夫か？」

「ずっと……ここにいたから……冷え込んできたの……かな。だるい……」

「マジかよ」

こりや何かのマンガか？ と彼は思った。恋人が体が弱い、というのは代名詞だ。そう、友人に聞いた事がある。

彼女の額に手をやるが、熱は無い。一瞬、ホツとするが、熱では無いときたら、どう対応するべきか迷う。

とりあえず、彼は上に羽織っていた上着を急いで着せた。

「大丈夫か？」

「全く」

少女は、はつきりと言う。少し少年は苦笑した。

素直に体調の事を言ってくれないと、困るという事を自分でも理解しているのだろうか。

「やけに素直だな」

「だって……大丈夫だ、なんて嘘が通じるほど……あんたとの仲は浅くないから……」

「！」

少年の熱が少し上がる。しかし、長い付き合いっていう事だろう

な、と考え直し、落ち着く。

そして、どうしようかと悩んでいるとき、急に声が掛かった。

「Hello、What is the matter with you?」

「!？」

英語で話しかけられ、戸惑いいつも誰から声を掛けられたのか、周りを見渡す。

何時の間に居たのか、すぐ傍にブロンドを後ろで纏めた女性が、にこやかに微笑んでいた。茶色いワンピースの下から、白い足が見えている。そして瞳は、まるで吸い込まれそうなくらい青かった。

「え……その」

「Hello」

体調を崩している少女の方が早く反応した。少年は、耳打ちする。

「ハローって、昼間に使うんじゃないのか？」

「し、知らないわよ」

「呼びかけや軽い挨拶にも使うのよ」

にこやかに答える女性に、彼はそうなんですか、と軽く驚いてみせる。それから、すぐに女性の顔を見つめた。

女性は、不思議そうな顔をして彼を見つめる。

「どうしたの？ 私、何か可笑しいかしら？」

「い、いえ……、日本語通じるんですか……」

「ええ、そうよ」

その女性は、とても日本語が上手かった。片言でも無く、時折英語の雰囲気混ぜる事も無かった。

その外見でなかったら、日本人としか思えない。ハーフなのだろうか。

「あ、私は……生まれてからずっと日本で暮らしてきました。両親が英語と日本語を使い、同居していた祖父や祖母も日本語を使っていましたので、両方使えるようになったんですけれど」

「おお」

彼が感嘆の声を上げていると、少女が呻きだす。女性は、心配そうに少女の顔を覗き込んだ。

そして、急に腕を取る。

「かなり状態が悪いようですね。風邪でもひいてらっしゃるの?」

「いや、こいつ体が弱いので」

「そうなんですか? では、私、何か手伝いましょうか?」

「いいです、いいです! ほら、一旦戻るか?」

少年が訊くが、少女は苦しそうにするだけだ。と、彼の露出した手に、冷たい雫が降って来た。それが、苦し紛れの涙だったらどれほどマシか、彼は思う。それは、紛れも無く雨だった。

しかも、雨はきつくなってゆく。これでは、少女の体調は悪化するだろう。

「済みません! こいつ、これ以上雨に当たったら、悪化すると思うんです! とうにかなりませんか?」

「では、私の店へ!」

そこで、少女と少年はまさか、と考えた。女性は、迷いもなく少年の手を引き、さつきまで入るか悩んでいた店の扉を開けた。

女性の店だったのだ。

店内は、明るく、棚が沢山置いてあり、そこに所狭しと商品が並んでいた。

「わぁ……」

少女の表情が少し良くなった。

少年は、ホツとする。しかし、少しだけだったのに、びしょ濡れだ。

「これじゃ、風邪ひくぜ」

「この服、着てみてごらん? あ、貴女の方から先に着替えておいで」

見兼ねた女性は、棚から白い布地のワンピースを取り出す。灰色

のぼんぼんが裾についていて、胸の部分にも、灰色のリボンが付いていた。

それから、デニムの長ズボンも出す。少女は、軽く頷いて女性に近づく。

「あの、どこで着替えましょう……？ あと、料金はッごほごほッ、どれくらッごほ……ですか」

「……いいえ」

「え」

「要りません。さあ、着替えましょう」

雨の神？（前書き）

どどどどど、雨だ！ 雪だ！ サンタさんだ！
↑

雨の神？

「要らないんですか……？」

少年は、女性に訊く。女性は、嬉しそうに頷いた。少し危ないかもな、と彼が考えていると、女性は楽しそうに説明した。

「これ、もう売れないかなって。近くにね、服屋さんが出来たんです。だから……誰かに引き取ってもらった方が、良いと思ったんですよ。私より、貴女達に来て欲しいそうじゃない？ おばさんなんかじゃなくて、若くて綺麗な子にね」

「おばさんじゃないですよ！ 貴女の方が似合い……ごほッ！ ……ます」

「大丈夫かよ？ 絶対、風邪ひくなあ。インフルとかに、なったら困るし……着替えさせてやってください。後日、お返しします」

「あら、良いのに」

女性は、にっこり笑う。そして、少女と一緒に棚と棚の間へ進んでく。丁度、彼から見えないだろう所で、少女は着替えだす。

女性は、微笑みながら言った。

「じゃ、先にあの子の元へ戻っているわね」

敬語では無くなっているのは、やはり女同士だからなのだろうか。少女が頷くのを確認してから、女性は少年の所へと戻る。

彼は、商品を眺めていて、女性には気づかなかった。女性は、驚かさないように注意して、声を掛ける。

「なんだ、男の子だから着替えシーンを覗くのかと思っていました」

「ん？ あ、居たんですか！ ……アイツの着替えシーンなら、昔からずっと見てきてるんで」

「えッ！？」

「その、幼馴染なんですよ。それに、アイツは体が弱くて、よく面倒見ているんです。今は、着替えシーン見たら、怒られると思いますけど、昔はよく一緒にお風呂入ったりもしましたよ？」

少年は、頬を掻きながら言う。照れているのだ。女性には、にっこり微笑んだまま言う。

「そういえば、お名前は？ 私は、ヴィノ・サバルナ。あだ名は、ヴィルナ」

「あ、ども。俺は——」

「着替え終わりました……コホン！」

少女が、そっと柵の影から出てくる。

ヴィルナが息を呑む。少女が、とても綺麗で、可愛かったからである。

見慣れてるから感動が薄れるのかな、などと思いつつ、少年は訊く。

「図々しいとは思いますが、雨が止むまで居ていいですか？ あ、けど確実に門限アウトになるなあ。でも、……我慢するかな」

「良いですよ。どうぞ、商品でも眺めていて下さい。ついでに今、六時です。門限は、何時ですか？」

「えっと、七時です」

「雨は後、一時間から三十分くらいで止むと思いますよ。間に合いますかね？」

ヴィルナは、優しく訊き返す。少年の代わりに、少女が咳き込みながら答えようとするが、咳が少し酷くなって、話すのをやめる。それを気遣いながら、少年は答えた。

「家まで十五分、悪ければ三十分は掛かるかも知れません。絶対、門限は破るな……、はあ。これじゃ、外出クリスマスまで禁止令、が発令されるぜ」

「クリスマスまで？ いつもそうなのですか？ それじゃ、クリスマス後日に禁止令が出たら……一年近く!？」

「いやいやいや、ヴィルナさん、それは無いですって。」

大体、一週間から二週間ですけど、クリスマス前は、クリスマスまでなんです。行事の日に、家で閉じこもるのもあれですし」

「なるほど」

ヴィルナは、納得したように頷く。

そして、扉に近づいて外の様子を探り始める。そして、十分くらい経ち、彼女は勢いよく振り返って言った。

「雨がきつくなってきました！ 予想外です！ 全く、雨の神の意地悪め！ 今年のプレゼントは少し安いのにしますよ！？ …… あ、済みません！ 口癖で……少し安いのは可哀想かしらね」

最後、ボソツと呟いて、彼女は外へ出て行く。

少女と少年は顔を見合わせる。そして、ヴィルナが何をするのか、扉に近づいて見た。

ヴィルナは、何か呟いている。よく聞こえないが、雨の中で寒そうだ。

「……。……？ ……！ ……ですね、お願いします」

ヴィルナは、最後の方は店に入りつつ呟く。不思議そうにヴィルナを見る視線に気づいたのか、ヴィルナは笑って言った。

「携帯電話ですよ。最後は切ってしまったのですが……私の癖なんです」

「へえ、———どんな携帯なんですか？」

会話しようと、何気なく少年がヴィルナに訊くと、ヴィルナは顔を突然顔を引きつらせた。視線を泳がせ、明らかに迷っている。

やっぱり恥ずかしいのだろうか？ と彼は考えた。ヴィルナは、彼と絶対目を合わせようとせず、迷い続ける。

その時、少女が咳き込みつつ叫んだ。

「雨が、ゴホ！ 止んで、る、わ！」

「えッ」

少年は、弾かれたように外を見る。扉から夕焼けの光が差し込んできているし、扉ごしの外に少し薄暗くて判りにくい、雨は見えない。

彼は驚きを隠せないまま、自然とヴィルナを見つめる。ヴィルナ

は髪を弄くりながら、嬉しそうに微笑んでいた。

「良かった、帰れるわね」

「は、はい。あの、服……」

少年は、頷きつつ訊いた。ヴィルナは、改めて気づき、少女を見つめる。

そして、すぐに言った。

「良いわ。もし、気になるというならば、返しにきてくれるかしら？」

「はい、いつごろにしましょうか？ 明日ですか」

サンタクロース

「そうね、クリスマスの夜じゃなければ良いです」

「やっぱり彼氏とデートですか？ 良いですね……、俺恋人いないんで」

「あら、その子は——ああ、幼馴染でしたね」

「はい」

少年は、少女の手を引いて店から出る。雨はすっかり止み、夕焼けが彼の横顔を照らす。しかし、薄暗いので少し不気味だ。

彼は、微笑んで言った。

「では、クリスマスの夜は遠慮します。俺も、門限破りになりますし」

「はい、また来てくださいね」

「ありがと、コホン！ ございます」

少女も、咳をしていたが、顔色は少し良くなっている。ヴィルナは、優しく微笑んで、頷いた。彼女も、夕焼けに照らされて、不気味というよりは、美しさが際立って見える。

今、見直すととても綺麗な人だな、と少年は思う。手の中に少女の体温を感じながら、彼は大きくお辞儀をした。

帰ろうとする少年に、ヴィルナは声を掛けた。

「あ、彼氏いないです。私」

「ヘッ」

「私、ここの地区の“サンタクロース”ですから、忙しいんです」

「はい？」

二人は同時に言った。ヴィルナは、クスクスと笑みながら店の扉を開けた。

少女が、何か言おうとする前に、ヴィルナがハッとして言った。

「貴女の服！」

「あ」

「待ってて！ 取ってくるわ」

彼女は、そのまま店に飛び込み、すぐ服を抱えて飛び出してきた。少女に渡そうとして、躊躇い、すぐに少年に渡した。そして、意味ありげにウインクして、笑う。

「あの……。いえ、いいです。あ、でも訊いときますね、やっぱり。サンタクロースって、どういう意味で？」

「そのままの意味です。good-by！ Good luck！」

「えっと、ぐっばい！ 後は何か理解不能ですけど！」

少年は、元気良く返しつつ、冗談だろうなと思った。サンタクロースのイメージは、白髭に赤い服、そして優しそうな笑みだ。一致するのは、笑顔だけ。

夜。

「遅い！ 遅い、遅い、遅い！」

親に叱られた少年は、ブツブツ呟きながら部屋に戻る。

と、すぐ電話が掛かり、少年は呼び出されてしまい、また親の所へ戻る。

「俺に電話あ？」

「ああ」

電話を突きつけられ、少年は渋々耳に電話をつけた。

電話から、綺麗な声がする。

「もしもし……」

「おう、どうした？」

電話の主は、あの少女だった。

「あの、やっぱり怒られた？ 私が、途中で転んだから、担いでくれてたのに、ごめんね」

「帰ったのは七時半だからなあ。あのヴィルナさんに、今何時か教えてもらえば良かった。そしたらのんびりと帰ったりしなかったの

に」

「はは、八つ当たりは駄目よ」

「で、体は？」

俺も優しいなあ、等と思いつつ彼は訊ねる。彼女は、大丈夫よ、と元気そうに言った。

そして、大きな溜息とともに言葉を吐き出した。

「じゃ、あの服返すのは、クリスマスのお昼にしようか。クリスマスまで謹慎処分でしょ……」

「俺も行かなきゃならないよなあ。ま、いつか。ok、悪いな」

後、少し話してから、少年は電話を切った。

電話を、チラリと見つめつつ、電話を親に返す。そして、部屋へと上がっていった。

クリスマス。

「あの店はどこかなー？」

彼らは、あの街を歩いていた。暖かい格好で。手には、借りた服を紙袋に入れて持っている。

「あれじゃないか？」

「うん」

ヴィルナの店を見つけ、扉をノックする少女。いやいや、店なんだからと突っ込みを入れつつ、彼は扉を開けた。

すると、突然声が掛かった。

「Merry Christmas！」

「ヴィルナさん！」

棚と棚の間から、ヴィルナが出てくる。少女は、迷わず紙袋を差し出した。

ヴィルナは、やっぱり良いのに、と呟く。しかし、少女は俄然と受け入れなかった。

「貴女のも物ですから。ヴィルナさん、ありがとう御座いました。と

ても着心地良く、買いたいな、と思つて。けど……お金が無いので」
「あらま、ではお金がたまつたらまた着てみる？」

笑いつつヴィルナは言つた。少年は、二人が笑いあつて話している間に、棚から可愛らしい人形を見つけた。手のひらサイズで、熊の人形だ。白熊で、首元に赤いリボンがしてある。

値札を見て、少年は無造作にヴィルナに差し出した。

「はい、お買い上げね」

「きゃつ、可愛い！」

「あ……、悪いけど、これな親に渡すやつ」
「もう」

その間に、ヴィルナはお金を受け取る用意を済ませていた。少年は、財布から札を一つ出し、お釣りをまた財布に流し入れた。

人形を受け取り、少年は礼を言いながら扉を開けた。プレゼント包装もしていないので、本当に親にあげるのだろう。

少女も、頭を何度もさげて、扉の外へ出て行く。

「またね」

「はい、また来ます」

「では」

短いあいさつを交わし、店を出て行く二人を、ヴィルナは見ている。

そのまま、家へ帰つていく二人。枯れ木の並木道が、どこことなく幻想的だった。

少年は、少女の鞆にそつと人形を滑り込ませる。少し鞆に違和感を感じた少女だが、気づかぬフリをして少年を見る。

「Merry Christmas」

「お、発音綺麗だな。——メリークリスマス」

二人は、少しだけ距離を縮めつつ、歩き出した。

深夜。

彼女の部屋に、あの服と、可愛い小物が置かれていた。

そして、彼の部屋……。

彼の部屋に、赤い物陰がちらつく。彼が、少し目を覚まして、何と無く窓を見るが、誰もいなかった。しかし、確かに聞こえた。

「Merry Christmas!」と。

彼女は熟睡していた。その枕元には、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8829i/>

クリスマス in 雑貨屋

2010年10月8日15時12分発行